

長岡協働型災害ボランティアセンター の歩みと取組み

(公社)中越防災安全推進機構
地域防災力センター
河内 毅

1

長岡市における近年の主な災害

- 中越地震(平成16年)
- 中越沖地震(平成19年)
- 平成23年豪雪
- 東日本大震災(平成23年)
- 平成23年新潟・福島豪雨
- 平成24年豪雪
- 平成25年7月・8月豪雨

2

H16年7.13水害・中越大震災

中越の各地で市民団体が活躍



しかし、それぞれバラバラ。連携はなかった。

このままではいけない ↓ 次の災害に備えた体制づくり

被災時対応検討会（H22.7～）

3

被災時対応検討会（平成22年度）

- 災害発生時におけるスムーズな被災地支援活動を目指して、関係各機関の役割を明確にし、緩やかなネットワークを構築する。

【ポイント】

- 普段から**顔の見える関係**づくり 互いに**助け合える**状態
 - 長岡市社会福祉協議会、中越防災安全推進機構、長岡青年会議所、
 - NPO住民安全ネットワークジャパン、NPO多世代交流館になニーナ、
 - NPOにいがた災害ボランティアネットワーク
 - NPOながおか生活情報交流ネット、中越市民防災安全士会、
 - 長岡市国際交流センター、日越コミュニティセンター、長岡市
- 行政主導ではなく、**民**（中越防災機構）が主導
- 定期的に議論（毎月）

被災時対応検討会の議論(例)

- 合併した周辺地域が被災した際は、防災センターが**バックアップ基地**になればいい。防災センターに**コア拠点**を作り、現場に実働部隊を派遣する。
- **場所と統括責任者**を決めておき、後は**現場対応**。基礎の部分だけを共有しておく。
- 中越では、支援をした人が復興に携わり、事業メニュー作りに大きく関わった。一連の流れをトータルで考えた方が長岡らしい。**長岡方式**を共有していきたい。
- 顔の見える人のところに各地から連絡が来る。ここにいるメンバーが**全国ネットワーク**を持っていることが一番の防災力。
- 地域防災計画に記載されている最低限のことは共有した方がいい。
- **ツイッター**から情報を収集できる**スキル**を関係者が身につけておく必要がある。
- 地域に埋もれている**有資格者**(助産師など)に活躍の場を提供する必要がある。
- 各分野で活躍できる**コーディネーター**を育成し、その分野をまたぐ**スーパーバイザー**を育成する必要がある。
- 災害時にだれがどのように動くのか、誰がどのような情報を持っているかを共有し、**互いに助け合える状態**を作っておくことが大事である。
- ボラセンが全部抱え込もうとするのは現実的ではない。コアとなる部分は必要だが、**外と連携**することも必要であり、外を受け入れるノウハウも必要となる。
- 「こんな人に来てほしい」「こんな支援が必要」という**地域ニーズ**はもっと発信すべき。

5

被災時対応検討会の決定(抜粋)

- 災害ボラセンは、長岡市社協を主体として、各種団体、個人ボランティア等の協力を得て、**協働型で運営**。
- 災害ボラセンは**公設民営**。場所は行政が用意。
- 社協と長岡市がボラセン設置の協議に入った時点で中越防災機構を通じて各メンバーに**連絡**。
- 都合がつくメンバーがながおか市民防災センターに**参集**し、今後の方針や対応を検討。
- 長岡の周辺地域が被災した場合、ながおか市民防災センターを**バックアップ基地(拠点)**とし、現場に実働部隊を派遣する仕組みとする。

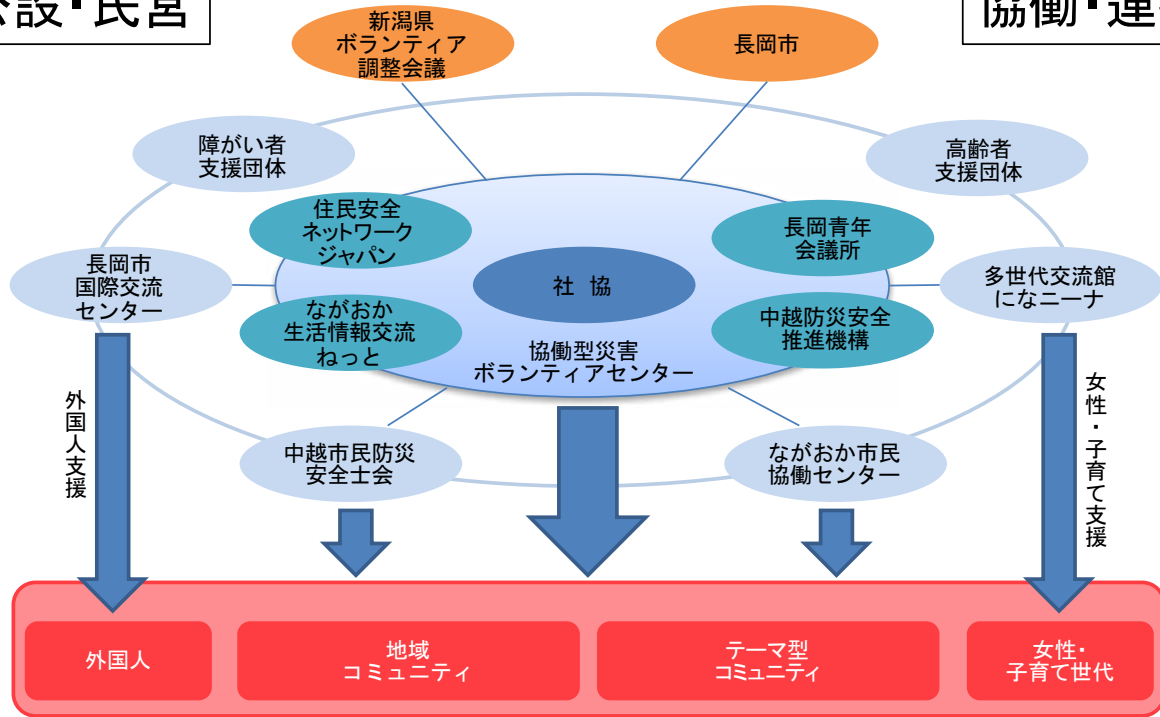
関係者間で「被災者支援」や「被災地支援」についての理念や考え方が共有できたことが最大の成果

6

長岡協働型災害ボランティアセンター

公設・民営

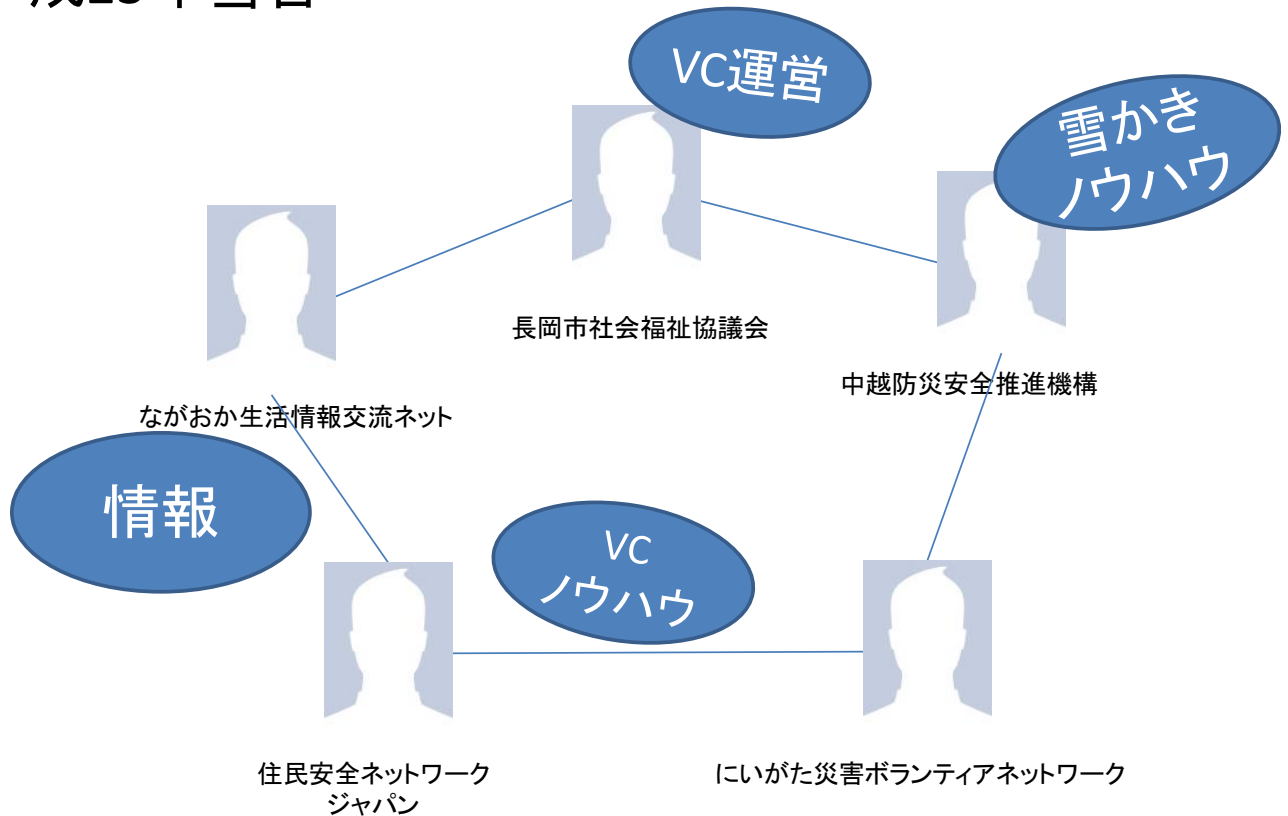
協働・連携



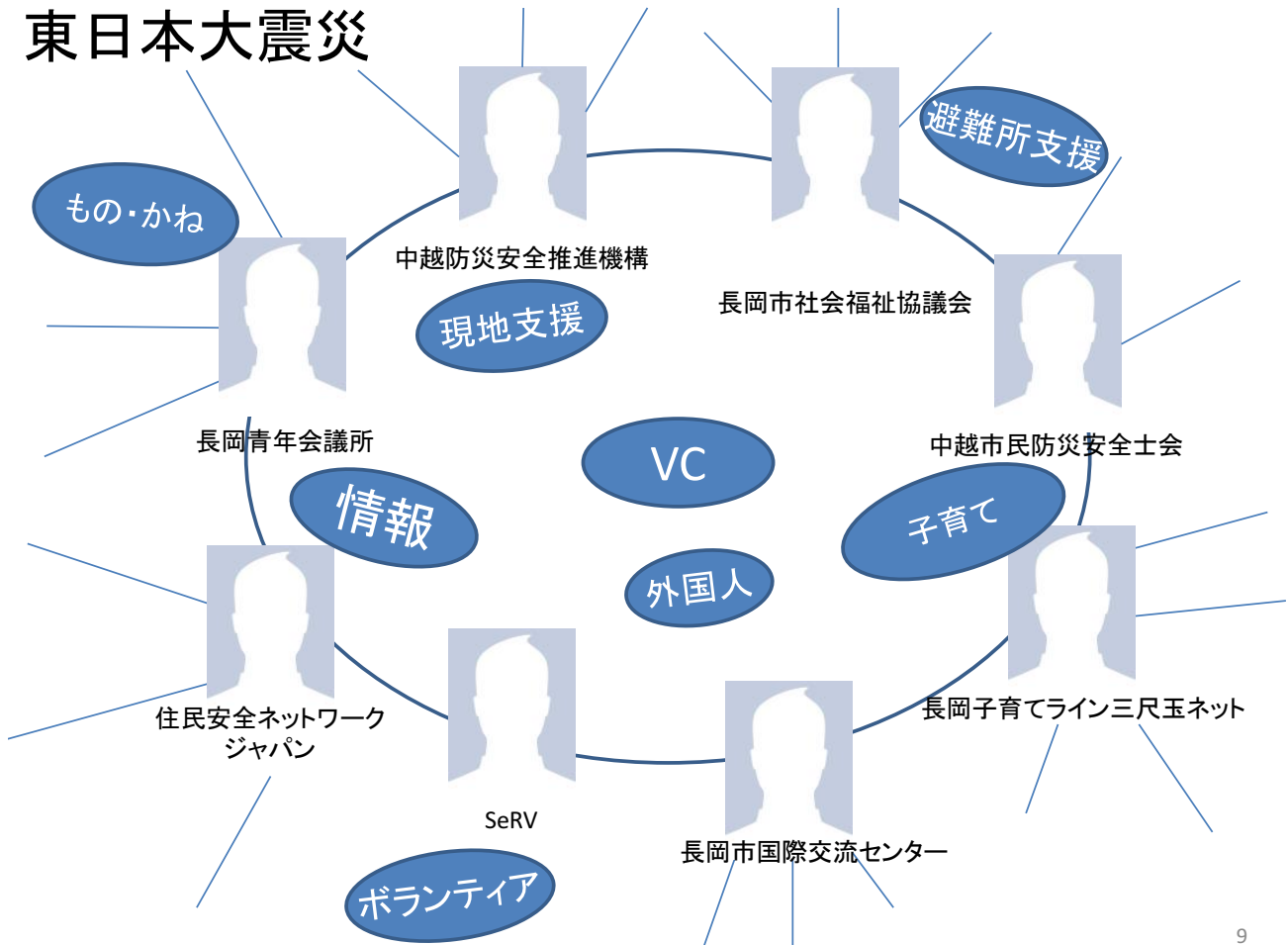
協働型災害ボランティアセンターのイメージ図

災害VCに所属する団体がそれぞれの特徴やネットワークを活かして災害支援活動を行う。

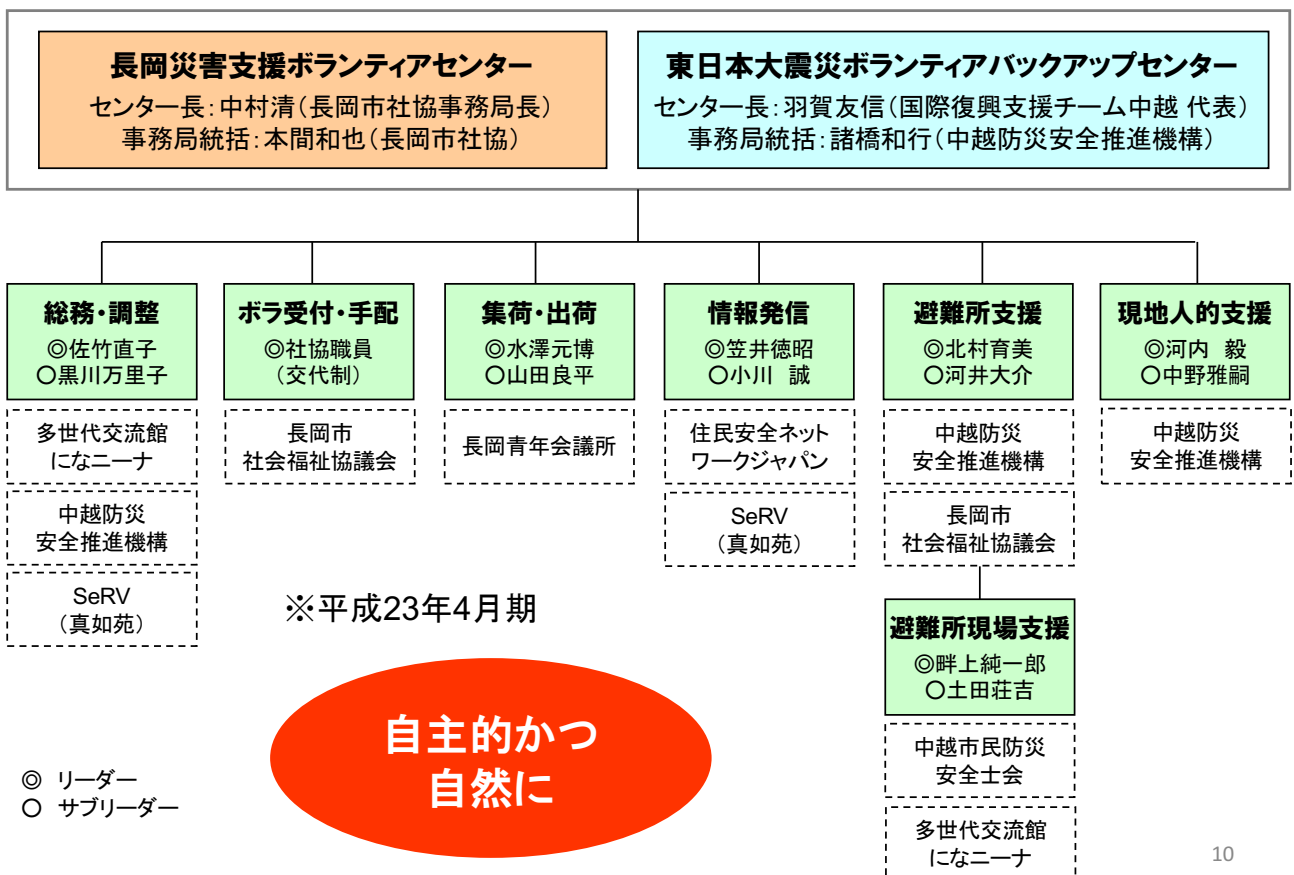
平成23年雪害



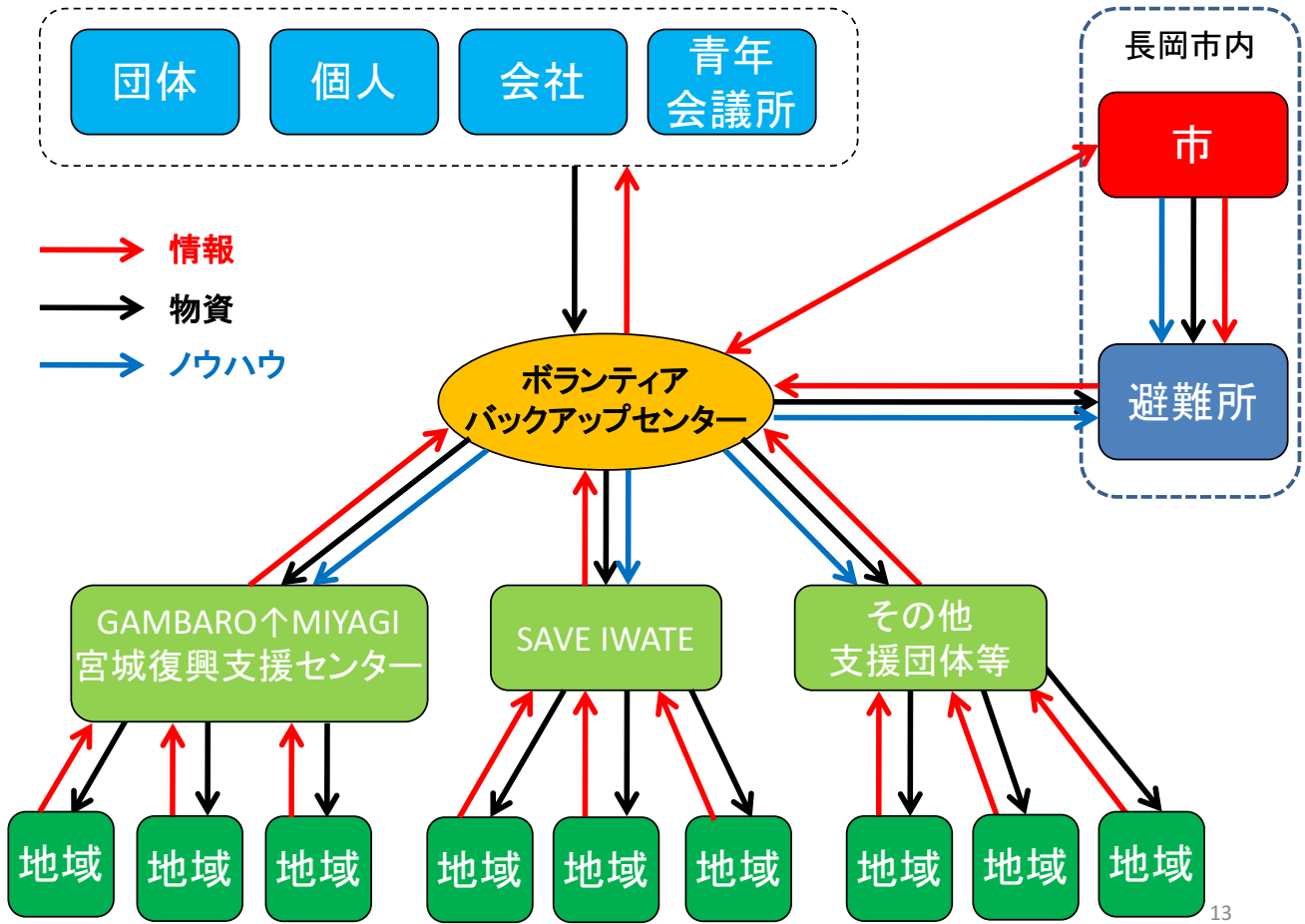
東日本大震災



協働型運営(公設民営)







平成25年7月・8月豪雨災害

VC運営

もの・かね



中越防災安全推進機構

長岡市社会福祉協議会

長岡青年会議所

にいがた災害
ボランティアネットワーク

VC

情報

安全ネットワーク
ジャパン

中越市民防災安全士会

ボランティア
・専門知識



ひのきしん隊



日赤

安全



野村防災

県外ドリームチーム

VC運営支援
・コーディネート





官民連携による災害支援(熊本地震)



派遣団体;長岡市、長岡市社会福祉協議会、中越市民防災安全士会、山の暮らし再生機構、中越防災安全推進機構

19

長岡協働型災害ボランティアセンター 平時の取り組み

- 災害支援団体・当事者団体間のネットワークの維持・構築を図ると共に、団体間の災害時の連携を考えるオープンな「**勉強会**」
- より具体的な災害対応を検討するクローズな「**検討会／連絡会**」

20

長岡協働型災害ボランティアセンター勉強会

第一回「水害対応を考える」

第二回「災害時のアレルギー支援を考える」

第三回「災害時の消防団との連携を考える」

第四回「災害時の地元企業との連携を考える」

第五回「災害時の障がい者支援を考える」

第六回「災害時の長岡市との連携を考える」

第七回「平成27年9月関東・東北豪雨災害支援から学ぶ」

第八回「災害時の高齢者支援を考える」

第九回「災害時における長岡青年会議所との連携を考える」

第十回円卓会議「中越から被災地へ」

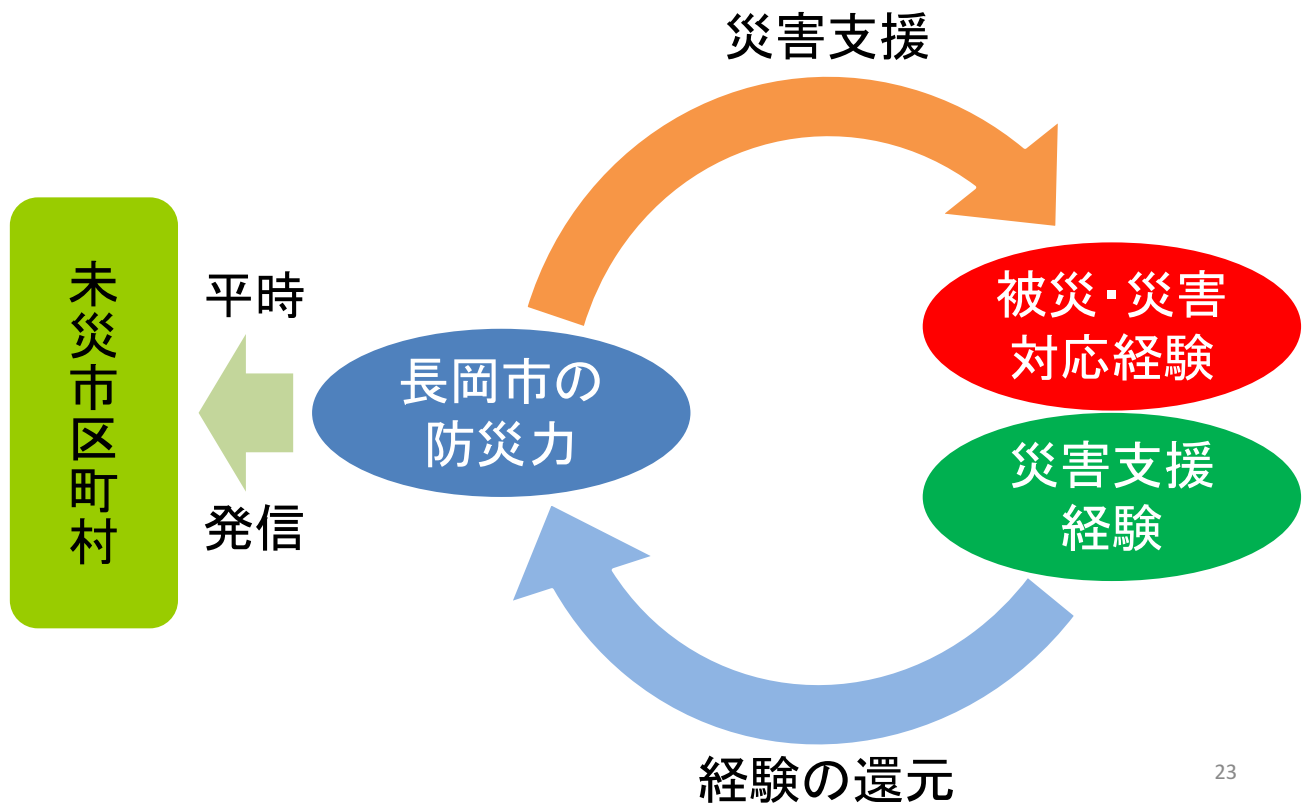
21

被災時対応検討会

- 長岡市における災害の検証と対策の検討
- 災害支援の経験から学ぶー被災地での支援経験の長岡への還元
(東日本大震災、平成27年9月関東・東北豪雨、平成28年熊本地震など)
- 過去の勉強会参加団体による意見交換会

22

日本一災害に強いまちへ 被災・支援の経験を他地域へ



チーム中越／長岡協働型災害ボランティアセンター

チーム中越／長岡協働型災害ボランティアセンターの理念

中越地震などの過去の災害において、様々な支援団体が活動をしました。それぞれが単独で独自の活動を展開したために効果的な支援活動ができませんでした。また、外部から様々な団体が支援に入りましたが、必ずしも信頼できる団体ばかりでなかったために被災地支援の現場において混乱が生じたケースも少なからずありました。このような経験から、私たちは「顔の見える関係・ゆるやかなネットワーク」が災害時は特に大切になると考え、活動理念・方針に賛同しただけの団体との平時からの顔の見える関係性・協働できる関係性・互いに学び合い成長し合える関係性の構築を図ります。

また、支援においては、被災者の自立を妨げず**自立・復興**を促すような支援を行うと共に、**被災者ならびに支援者(ボランティア)のエンパワーメント**の視点、被災者⇨支援者、支援者⇨被災者間の**双方向の学び**を大切に支援活動を展開し、その先の復興へとつなげます。

それぞれの団体の特徴・専門性を活かした支援



市外災害支援

- つながりのある地域を支援
原則としてチーム中越ならびに協働団体のつながりがある地域が被災した場合に、チーム中越が主体となり、支援活動を実施します。
- つながりのある団体・個人を支援
チーム中越と直接つながりが無い地域で災害が発生した際に、CODEなどチーム中越と関連する団体と連携し、以下のような活動を実施します。
 ▶ 支援のための募金活動を展開
 ▶ 他の支援団体と連携し、プロジェクト型で支援活動を展開

その時に動ける団体が連携・協働して行う支援

長岡災害支援

- 協働型災害ボランティアセンターを**設置・運営**
 ▶ 社協を主体として協働型で災害ボランティアセンターを設置し、被災地支援活動を展開します。
 ▶ 災害ボランティアセンターと協働団体が連携し、それぞれの専門性を活かした支援活動を展開することで、それぞれの長所を最大限に発揮します。

チーム中越／長岡協働型災害ボランティアセンター平時の活動

- **勉強会の開催**
 ▶ 勉強会を通して様々な協働団体の専門性を学び、災害時ならびに平時における連携の可能性を模索します。
 ▶ 勉強会を通じて団体間の顔の見える関係を構築します。(ネットワーク構築)
- **災害をきっかけとした被災地への研修事業などの展開**

これら平時ならびに災害時の活動を通して、人材育成を行います。

チーム中越の組織体制

平常時
 チーム中越理事による理事会が中心となり運営を行います。

災害時
 上記災害時の活動方針に基づき、原則として被災地とつながりのある呼びかけ人が中心となり被災地支援活動を展開します。理事会はその活動の執行の判断やサポートを行います。

長岡協働型災害ボランティアセンターの組織体制

長岡市社会福祉協議会を主体として、長岡青年会議所や中越防災安全推進機構、市内のNPO団体等が協働で運営を行います。